改正銅版横浜地図 明治 13 年 1 月出版 （下方部分はカット） 横浜市中央図書館所蔵

特集 横浜歴史のブラタモリ的地形考察

―地形が開港後の横浜を発展させ、地形が大震災後の横浜離れ、東京集中へと向わせたか？―

今年の５月１４日に放送されたＮＨＫ『ブラタモリ』のテーマは「横浜の秘密はハマにあり」でした。同時期(4/15―7/18)、横浜開港資料館では特別展示「ハマの大地を創るー吉田新田から近代都市へー」が催行されました。この別々に企画されたと思われる番組と展示が私には一つのストーリーとしてつながっているように思えてしかたがありません。 ブラタモリは地形にこだわって歴史の秘密に迫っていく内容で、横浜村が開港場に選ばれた理由が「ハマの地形」にあったとの解説でした。一方の特別展示は、江戸時代に開発された吉田新田(＝広い平坦な土地)が形成されていたことが、横浜が大都市へと発展・拡大できた要因だとしています。それらも踏まえて、江戸時代から近世までのハマの地形の変化をたどりながら、横浜の歴史の推移を考察してみたいと思います。

ジャン・ヨコハマ

横浜の原風景(吉田新田開発以前)

大岡川の河口を頂点に、本牧の岬を削る潮流に運ばれてできた砂州が底辺となって江戸湾を仕切り、内海が形成されていました。この横に広い浜が、横浜の地名の由来と言われています。紺碧の内海、そこに浮かぶ小舟の白い帆、緑の松林と白い砂浜、遠くに富士山を望む風光明美な所で、浮世絵にもたくさん描かれています。（この浮世絵は吉田新田完成の 100 年以上後の作品ですが、完成以前の風光明美な景色をイメージしやすいと思い使用しました。）

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

吉田新田開発前後(約 350 年前)

江戸時代になると幕府は積極的に新田の開発を奨めます。(積極的といっても幕府が公共事業として行うのではなく、許可を得た民間人が行いました。幕府は年貢米が増えればよい訳です。)

沿岸部での新田開発は主に水深の浅い内海を干拓する方法が採られます。現横浜市域では吉田新田が一番大掛かりな開発となります。ここの開発の権利を得た江戸の材木商・吉田勘兵衛が１１年の歳月をかけて寛文７(1667)年に完成させます。ちなみに、吉田新田は来年で、完成 350 周年になります。

この吉田新田が存在していたからこそ、その後、海側に横浜新田（中華街となる）、太田屋新田（関内地域を形成）が造成されていき、横浜村が開港場となりうる要素を十分に備えていたと考えられます。

開港前後の横浜(幕末から明治初め)

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.

横浜村幷近傍之図 （開国開港期 1854-1867） 横浜市中央図書館所蔵
この図は嘉永 4（1851）年に作成され、その後開港後に追加して補ったもの。開港以降地形が大きく変わったものは朱筆で表している。左の文章の最後に、 明治 2 年に州干弁天社を移して埋立てたことで、「因テ此風景佳好ノ地遂二跡ヲ絶テリ。」とあって、当時の人が、横浜の美しい風景が失われたと述べている。

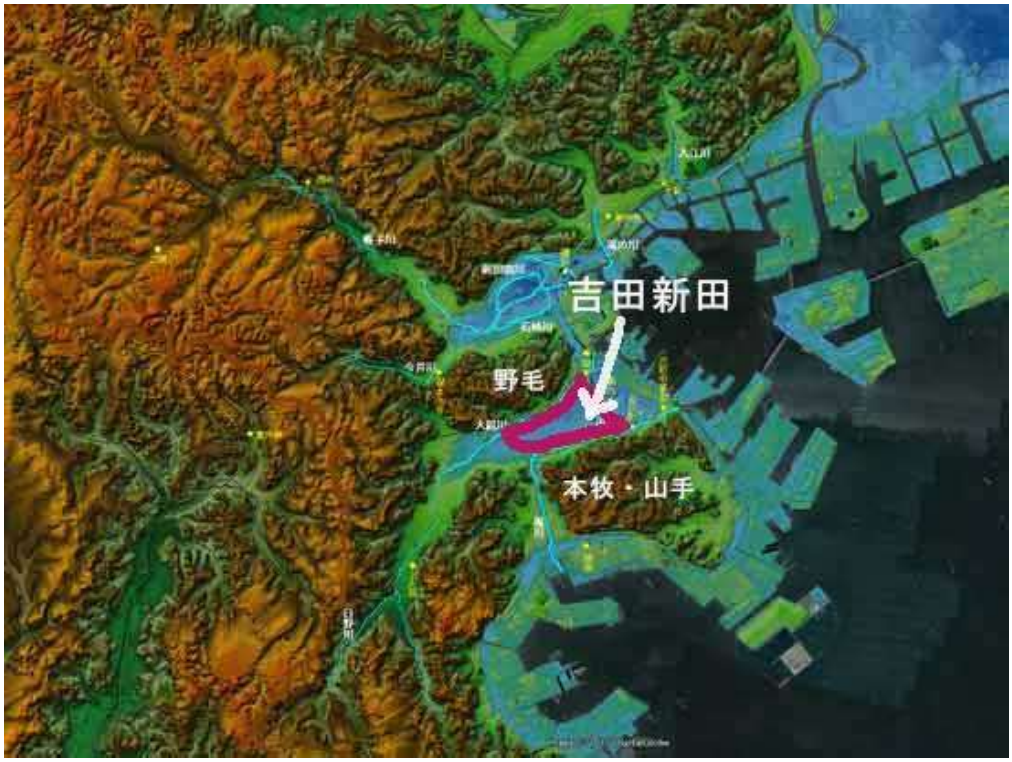
米国などを含む安政五カ国条約の締結（1858 年）で、神奈川の開港を約束した幕府は、強引に横浜も神奈川（の一部）であると主張して、横浜を開港場にします。 それは、東海道神奈川宿を避け、江戸から遠からず近過ぎず、ブラタモリでも指摘の通り居留地を出島状態にできる絶好の地形だったからでした。安政 6 年 6 月 2 日（1859 年 7 月 1 日）の開港直後ただちに、幕府は元町と外国人居留地の間に、中村川を延伸した掘割をつくり「堀川」（同年内に完成）とし、完全に出島状態にします。関内と関外の誕生です。尊王攘夷の武士たちによる外国人への襲撃を防ぐためとの名目のようでしたが、 このあまりの対応の早さ、最初から幕府はこうするつもりだったのでしょう。神戸や他の居留地もできればこうしたかったのでしょうが、横浜のように好都合な地形ではなかったようです。トップに掲載の「改正銅版横浜地図」は、上方の吉田新田部分、下方の台形型の関内の姿が良く表れています。、

近代都市横浜へ(近現代)

明治 32（1899）年、条約改正で外国人居留地は撤廃され、すでに日本一の貿易港として発展していた横浜港を持つ横浜市（明治 22〔1889〕年に市制施行）は関内だけには収まりきれず、次々に市域を拡張していきます。その中でも吉田新田の広い平坦な土地が横浜発展・拡大に大きな役割をはたしたと開港資料館の特別展示は訴えていました。確かに、現在、横浜市の人口は東京に次ぐ日本第 2 位の 373 万人(平成 27 年国勢調査速報)の、まさに大都市です。

しかし、地図をご覧いただくと判る通り吉田新田なども含めた埋立地を除くと、横浜はほとんどが急峻な丘の連なる地形です。つまり、吉田新田のほかには広くて平坦な地域がないのです。大正 12（1923）年に関東大震災が起き、主だった殆どの建物が倒壊・焼失してしまいました。そして、その後の復興過程で、多くの企業が本社を首都・東京に移転し、海岸埋め立てにより平坦地は鶴見、川崎、品川、東京へと拡張、京浜工業地帯が形成され、日本の重工業の屋台骨へと発展していきました。反面、生糸や茶の輸出で財を成した横浜商人たちは輸出量の激減で衰退の途をたどっていき、こうして横浜独自の開港～明治期の栄耀栄華は過ぎ去っていきました。特別展示の主張する平坦地が横浜の都市発展を支えたとすると、その後、横浜が東京を追い抜けず、東京一極集中に向かっていったのは地形のせいもあったのかも知れません。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.



この地形図は高低差が非常によく表れています。なるべく多くの方に見ていただきたいので、
http://blogs.yahoo.co.jp/brobura/38951020.html より転載・加工させていただきました。
不都合がある場合はお知らせください。

Copyright© 横浜歴史さろん Yokohama History Salon. All Right Reserved.